
あの日、透明な想い ~ もう1つの想い~

中澤ミサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日、透明な想い ～もう1つの想い～

【Nコード】

N7925X

【作者名】

中澤ミサキ

【あらすじ】

本作は『あの日、透明な想い』のサイドストーリーです。本編にも登場した、緋桐ユリに焦点をあてた短編になっています。（全3話）

以前、『あの日、透明な想い』内に収録していたものを独立させました。ストーリーに変更はありません。

1 激痛

パンツ。小気味良い音が辺りに響いた。

弓道衣に身を包んだ緋桐ユリは、静かに腕を降ろして手を腰にあて、小さく息をつく。ユリが放った矢は二十八メートル先にある的の3の白を射貫いていた。

「部長？」

「伊吹くん」

ユリが振り返ると、同じ弓道部の伊吹アオイの姿があった。その日の部活はすでに終わり、夏の熱い日射しも届かないこの時間、アオイは制服に着替えて学校指定のバッグを抱えていた。

「どうしたんですか。今日の部活ならもう終わって、みんな帰りましたよ？」

「うん、ちよつと気分転換にね」

ユリたち三年生はすでに引退していた。部に顔を出すのは稀で、夏休み中の今では尚更だった。それは弓道部の元部長であるユリも例外ではない。

ユリはバッグからタオルを取り出すと、額から流れる汗を拭き取った。

「ああ、ひよつとして還魂祭の……」

「そう。神楽舞の練習をしてただけど……。三年間続けた弓道だからかな、急にハイ引退ですって言われてもちよつと寂しいし。で、気分転換も兼ねて……ね」

賢木町でもつとも大きな神社である緋桐神社では、毎年 還魂祭と呼ばれる祭事が行われている。還魂祭は三日間行われ、初日には故人の魂を導くための 送り火 と呼ばれる火が焚かれる。二日

目には故人と賢木町の人々が楽しく過ごせるようにと緋桐神社の舞殿^{どの}では神楽舞が行われる。三日目には再び故人を送り出すための送り火 として、無数の螢^{ほたる}が放生されることになっている。

ユリは二日目に行われる神楽舞で、初めて舞うことになっていた。これまでは弓道部の活動もあつて舞の練習時間が取れなかったが、引退した今では毎日のように舞の練習をしていた。

「やっぱり舞の練習って大変なんですか？」

「うん、そうだね。正直言うと、踊り自体が苦手なのよね」

照れくさそうに頭を掻きながら、ユリは苦笑いをした。

「でも、部長なら大丈夫ですよ」

「ねえ伊吹くん」

はあ、と息をついて、ユリは答めるようにアオイを見つめた。

「な、何ですか？」

「部長つて言うの止めない？ 私はもう引退してるんだし。それに新しい部長は君でしょ」

やや咎めるような口調でユリは言った。

「そ、そうですね……僕にとっての部長はやっぱり緋桐先輩で…

…」

「伊吹くん」

ユリはもう一步踏み込むようにアオイを見つめた。

「わ、分かりました……緋桐、先輩」

「よしっ」

ユリは満足げに微笑を浮かべた。アオイはその不意打ちの微笑に鼓動が高鳴る。

整った顔立ちにすらりと伸びた白く細い手足に、後ろでまとめられた長く艶やかな黒髪をもつユリは、弓道部だけでなく校内でも際立っていた。

後輩の面倒見も良く、誰にでも気さくに話しかける姿勢もまた、好印象の要因となっていた。とくに、弓を射るときの凜と引き締まった表情は、男子だけでなく女子部員からも熱い眼差しを集めた。

アオイも他の部員たちと同様に、ユリに対して憧れ以上の感情を抱く一人だった。

「伊吹くん。私はもうしばらくいるから先に帰っていいよ。戸締まりも私がやっておくから」

「はい、分かりました」

アオイは挨拶をしてからユリを残して道場をあとにした。再び一人になったユリは左手に弓を、右手に矢を持ってゆっくりと両腕を上げる。流れるような動作で、左手で弓を押し出すと同時に右手は弦を引いた。的を見据えたまま、弓を引ききった状態から矢が放たれた。

それは突然の出来事で、何の前触れもなくユリの身に起きた。

朝、目が覚めたユリはいつものようにベッドから起きて着替えようと寝間着に触れたとき、電流が走ったかのような鋭い痛みがユリの両手に広がった。

「っ……っ！」

あまりの痛さにユリは思わず両手を開いて、じっと見つめた。特に外傷はなく、いつもと変わらない手のひらがあった。しかし、両手には確かに痺れるような痛みが残っている。ユリは確認するかのようにもう一度服に触れると、やはり鋭い痛みが両手を襲った。

「何……これ」

ユリは何度か試すうちに、何かに触れただけで痛みが起きること、ゆっくりと触れば多少は痛みが軽減されることが分かった。しかし、なぜそうなったのか、その原因は分からないままだった。

ユリは少しでも痛みを抑えられるようにゆっくりと衣服を着替え、自室を出た。食卓に並んだ朝食も、静かに箸を持ってゆるやかな動作をすることで、何とか済ませることができた。

自宅にある道場で、いつものように舞の練習をしようと神楽鈴を持つが、目に見えない痛みは容赦なくユリの両手を襲う。

「もう、何なのこれ！」

ユリは苛立ちを隠せず、思わず声を荒らげた。大きくため息をついて気持ちを落ち着かせると、練習を中止して道場を後にした。

駆け出すように家を出たユリは、あてもなくただ賢木の町を歩いた。鮮やかな青一色の空からは、夏の陽光が容赦なく降り注がれている。そこらじゅうから聞こえてくる蝉の鳴き声は、夏の暑さとユリの苛立ちを増長させる。

暑い日射しを受けながらも、ユリの足はいつの間にか賢木高校へと辿り着いていた。高いフェンスに囲われた高校の外周に沿って歩いていると、遠くからパンツという音が聞こえてくる。

校内に目を向けると、弓道部の練習が行われていた。

「……………」

ユリは自身の手のひらを見つめた。

病院へ行けば原因や治療法は分かるかもしれない。でもそうしたら、医者には舞を止められるかもしれない。還魂祭まであと数日しかないのに…………それは嫌。どんなことがあっても、ちゃんと舞はやりたい。でも…………。

こんな状態で、還魂祭当日は舞うことができるだろうか。ユリは頭の中をよぎった不安を否定するように、強く頭を振って追い出した。

「緋桐先輩！」

不意に声を掛けられた、ユリは驚いたように振り向いた。そこには息を切らした、弓道姿のアオイが立っていた。

「伊吹くん」

「先輩、何かあったんですか？」

「え…………？ な、何もないわよ。伊吹くんこそ急にどうしたの？」

アオイは乱れた呼吸を整えるように深呼吸をして、落ち着きを取り戻す。

「さつき、道場から先輩が見えて。俯いてて何だか元気がなさそうだったから…………」

ユリは先程まで見ていた弓道場に目を向けた。弓道場では部員たちが黙々と練習を続けていた。こちらから見えると言つことは、向こうからも見えていたのかと、ユリは納得した。

「だから……何でもないって言ってるでしょ。心配性だなあ、伊吹くんは。ほら、早く戻りなさいよ。部員たちが真面目に練習してるのに、部長がこんなところにいちやダメでしょう」

ユリは明るく振る舞っていたがどこかきこちなく、それがアオイをより不安にさせる。

「先輩、やっぱり何かあったんじゃないですか。何というか、いつもとちよつと違つていうか……」

「だーからっ。何でもないって言ってるでしょう。それじゃあ私、もう行くね。部活、頑張つてね」

ユリはこれ以上詮索されないよう、強引に話を終わらせて歩き出した。

「ちよつ……先輩っ！」

やっぱり様子がおかしい。いつもの先輩らしくない。ユリが何と言おうと、アオイは素直にユリの言葉を受け取れなかった。

立ち去ろうとするユリを引き留めようと、アオイがユリの手をつかんだ瞬間、

「ああっ……！」

「せ、先輩？」

ユリは手を捕まれると同時に、その激痛に耐えられず声をあげた。それほど強く握つたつもりもないアオイはユリの反応に驚き、反射的に手を放した。アオイから解放されたユリは捕まれた手を庇うようにして、痛みに耐えるようにその場に座り込んだ。

「い……っ……」

「え……先輩。手、どうかしたんですか？」

「な、何でもない、から……く……大丈夫だから、気に、しないで……」

どんなに言葉では強がって見せても、今のユリには説得力はなか

った。ユリの身に何が起きているのか分からないアオイは、みつともなく狼狽えた。

「えっと……先生を呼んだ方が……あ、いや、救急車の方が……」

「ダメツー!!」

「え?」

アオイはユリの叫びにも似たようなその声に驚いた。

「だ、大丈夫だから。しばらくしたら治まるから。誰も呼ばないで、お願い……」

「先輩……」

ユリの必死の懇願に、アオイはただ苦しむユリを見ていることしかできなかった。

「さつきはごめんね、伊吹くん」

痛みが治まり落ち着きを取り戻したユリは、アオイに素直に謝った。

「い、いえ……でも、本当に大丈夫ですか?」

「うん、とりあえずは……ね」

それから二人のあいだに沈黙が続いた。ユリは誰にも知られなかった手のことをアオイに知られたことをどうするか、アオイはユリに何と声を掛ければいいのか分からないでいた。

知られてしまった以上は、もう隠すことはできないと観念したユリは、静かに沈黙の壁を切り崩した。

「はあく。見られたからには、もう隠せないわね」

「先輩……」

「昨日からこうなの。朝起きたら、手で何か触れようとするとすごく痛むの。でも、これを誰かに知られたら、病院に行けっっていわれるだろうから」

「当たり前ですよ。病院に行った方がいいに決まってるじゃないですか」

ユリは静かに首を横に振った。

「だめ。それだと、舞ができなくなっちゃう。私はちゃんと舞をやりたいの。だから今は行けない。還魂祭が終わるまでは……」

ユリの眼差しはどこまでも真剣で、揺るぎない意思が宿っていた。ユリの精神的な強さは、同じ弓道部の部員としてアオイはよく知っていた。だからこそ弓道では誰よりも上達し、部長を務められたのだと。近くでユリを見てきたアオイにはそれがよく分かっていて、再び二人のあいだに沈黙が降りる。

アオイはさんざん悩んだ末に、ようやく口を開いた。

「分かりました。このことは誰にも言いません」

「伊吹くん……」

「その代わり約束してください。還魂祭が終わったら、必ず病院に行くって」

「うん……ありがとう」

ユリはアオイが出した結論が素直に嬉しかった。俯いたユリの口元はわずかに緩み、それはアオイからは見えることはなかった。

「ほら、はやく道場に戻りなさい。みんな伊吹部長を待ってるわよ」
ユリは気持ちを切り替えて、本来の明るい笑顔でアオイに戻るよう促した。その笑顔に安心したアオイは「分かりました」とだけ言い残して、道場へと戻っていった。

アオイの後ろ姿に向けて、ユリは誰にも聞こえないような小さな声でもう一度「ありがとう」と呟いた。

2 彼女の弱音

ユリは痛みと闘いながら、自宅にある道場で舞の練習を続けた。何度も、何度も。しかし、どんなに我慢しても神楽鈴を手に舞を続けることはできず、ことある事に刺すような鋭い痛みが走っては神楽鈴を落とす。その繰り返しだった。

何度目かの神楽鈴を落としたとき、ユリは深いため息とともに大の字になって冷たい道場の床に寝転んだ。

「はあ、はあ、はあ……」

天井をじつと見つめたまま、乱れる息づかいだけがやけに耳に響いていた。神楽鈴を握るたびに激痛が走り、その痛みを耐え、しかし限界が来て鈴を落としてしまう。そして再び鈴を握る。

弓道部の誰もが認めたユリの精神力は、限界を迎えていた。もうここまでだろうか。あきらめの言葉が何度も胸を締め付ける。続けられない悲しさと悔しさが、ユリの目から頬を伝ってこぼれ落ちた。不意に道場の扉が開く音が聞こえた。

ユリは慌てて涙を拭って上体を起こした。開かれた扉には意外な人物の姿があった。

「……伊吹くん？」

「あの、舞の方はどうなのかなと気になって……」

本当は舞ではなく、ユリ自身の方が気がかりだった。それが口にすることはできずに、アオイはどこか気恥ずかしそうな表情で言った。

つい先日、アオイに強がった態度を見せたユリだったが、今は虚勢を張ることもできなくなっていた。

「……………」

「先輩？」

ユリは沈んだ表情のまま押し黙った。ユリの姿は、今までアオイが見たこともない、とても弱々しくて小さく見えた。そのまま放っておけば消えて無くなりそうなほど、これまでのユリらしさはどこにもなかった。

「先輩、やっぱり手が……」

アオイは静かにユリのもとへ歩み寄った。近づいてもユリ存在感は希薄で、それどころかますます小さくなっていくようだった。

「……り……も……」

「え？」

俯いたユリから消え入りそうな震える声が漏れる。小さく光るものが、ユリの顔からこぼれ落ちて床を濡らした。

「やっぱり、ムリかも……」

「先輩……？」

「やっぱりムリよっ！ 少し触れただけで凄く痛いのに、ずっと鈴を持ったまま舞い続けるなんてムリ！ できないよっ！！」

「……………」

ユリは隠すことなく、目を赤く腫らした泣き顔をアオイにさらけ出した。アオイはユリの泣き顔を初めて見た。弱々しく、触れれば簡単に崩れてしまいそうなユリの姿は、ユリではないまったくの別人のように見えた。

弓道部では部員たちの憧れで、的を見据える顔は凜々しくて、どんなことにも揺るがない強い精神をもつユリはどこにもいなかった。そこには、苦痛に耐えきれず、やりたいことを続けられないでいる一人の女の子がいるだけだった。

「先輩」

泣き崩れるユリに、アオイは何か声を掛けなければと必死で考えた。

「僕には、先輩がどれだけの痛みを耐えてきたのか分かりません……」

アオイはゆっくりと慎重に言葉を探し選びながら続けた。

「ここで舞を止めて、病院に行ったって誰も先輩を責めはしませんよ」

「……………」

ユリの瞳からは、まだ涙が止まることなく溢れ続ける。アオイはできる限り優しく、穏やかに言葉を紡いだ。

「止めることはいつでもできますよ。でも、続けることは今この時にしかできません。これまで先輩が頑張ってきたことを僕は知っています。弓道部のこと、舞のこと、手のことも。でも、だからこそ、諦めないで欲しいんです。今まで頑張ってきた先輩を、先輩自身が見捨てないで欲しいんです」

「伊吹くん……………」

これは正しいことだろうか。先輩を追い詰めるだけなんじゃないか。アオイは悩みつつも、それでも自身の願望を言わずにはいられなかった。やりたいことを諦めて欲しくはなかった。

「弓道部部長の緋桐ユリは強くて、凛々しくて、優しく、僕の憧れの存在なんです」

「え……………」

アオイは自分が発した言葉に思わず頬を赤らめた。

「あ、いや……………僕だけじゃなくて、部員みんなの憧れなんです。今みたいに諦めようと思うことがあっても、でもやっぱり最後には立ち上がって欲しいんです」

アオイを真っ直ぐに見つめるユリの瞳は、少しずつ本来の明るさを取り戻しつつあった。それまで流れ続けていた涙はいつの間にか止まっていた。

「伊吹くん」

「は、はいっ！」

「……………生意気」

「す、すみません……………その……………」

しかし、ユリはくすりと微笑んだ。

「でも……………ありがとう」

ユリは立ち上がりながら右腕で涙の跡を拭い、大きく深呼吸をした。

「はあく、まさか後輩に救われるとはね」

「先輩……」

「うん、やっぱり伊吹さんに部長をやってもらえて良かった」

「いえ……先輩に比べたらまだまだ……」

ユリは静かに首を横に振った。

「私は良かったって思ってる。間違ってたなかったって」

ユリは穏やかに微笑んで言った。それを見たアオイはようやく安堵した。

「それじゃあ僕、もう行きますね。練習の邪魔になるんで」

アオイが扉からでようとしたとき、ユリは背後から声をかけた。

「ねえ、伊吹くん」

「何ですか？」

「その、私が泣いてたことは内緒にしておいてね」

「もちろんです」

ユリの家をあとにするアオイを見送り、ユリは練習を再開した。

神楽鈴を持つ手は相変わらず激痛が走る。そのたびにアオイの言葉を思い出して、ユリは舞を続けた。

舞の練習は陽が沈んで外が暗くなっても続けた。

遠くから人々の賑わいが、かすかに耳に届いた。還魂祭の初日の今日は 送り火 の日だ。時間的にも、もう舞殿の前で送り火がついたかもしれない。そのようなこと考えながら、流れる汗をそのままに、ユリは練習を続けた。

神楽鈴を持つ限り、痛みはユリを襲い続ける。だが、何度も繰り返してきたためか、痛みが少なくて済む持ち方のコツを掴み始めていた。少しずつではあるが、神楽鈴を持ち続けられる時間が長くなっていた。

不意に、痛みと汗から神楽鈴がこぼれ落ち、大きく音を立てて床に転がった。そのとき、閉じられた扉からガタンと音がした。

「誰？」

おそろおそろ開かれた扉から、ユリの従妹である柊カエデの姿があった。

「ごめんねユリちゃん。覗き見するつもりはなかったんだけど……」

「カエデ？」

カエデは申し訳なさそうに言った。

三歳年下の可愛らしい妹のようなカエデに、それまで張り詰めていたものが一気にほどけた。

「なんだ、来てたのなら言ってくれば良かったのに」

「だって……舞の練習を邪魔しちゃ悪いと思って……」

「そんな気を遣わなくていいの」

ユリは床に置いたタオルをそつと拾い上げると、顔や腕を流れる汗をゆつくりと丁寧に拭き取った。

「ねえ、練習の方はどう？」

「んー、まあまあ……かな」

訊ねるカエデに、当たり障りのないようにユリは答えた。しかしカエデは、その言葉を疑うようにじつとユリを見つめた。

「な、なに？」

「本当に？　なんだか疲れがたまってる感じだよ？　それに少し目の周りが赤いような……」

カエデは昔からそうだった。普段はふわふわとした、おっとりした感じがあるのに、なぜか妙に鋭いところもある。それでも手のことを話すつもりはないユリはごまかし続けた。

「大丈夫だって言ってるでしょ。それより、後ろの二人は？」

ユリは話題を逸らそうと、扉からこちらを覗き込んでいるカエデと同じ年くらいの男の子と女の子を見て言った。

「ああ、水樹アカネちゃんと周防ナツメくん。二人とも同じ年で私の友達なの。ユリちゃんがここで練習してるって聞いたから、一緒

に見に来たの」

「そうなんだ。無理矢理連れてきたんじゃないの？」

ユリはカエデをからかうように言った。

「違うよー」

「ま、そういうことにしておいてあげる」

カエデは二人を置き去りにしたままユリと話し込んでいたのを申し訳ないと思ったのか、二人の元へと戻っていった。

「ごめんね二人とも」

カエデは弾んだような声で言うと、ユリがその後ろから、

「カエデが無理に引つ張ってきたんだって？ ごめんね」

「無理矢理じゃないよー」

カエデは頬を膨らませて反論した。怒っていることを主張しているつもりはその表情には、まったくの凄みはなく、むしろ可愛らしくさえ見えた。

「明日、舞殿で舞をやるから。良かったら二人も見に来てよ」

二人はカエデの可愛い反論に笑いながら、はい、と短く答えた。

ユリは三人を見送り、その姿が見えなくなったのを確認すると扉をそつと静かに閉めた。床に転がったままの神楽鈴を拾おうと指先に柄が触れたとき、苦悶の表情を浮かべた。じっと見た手のひらには、痺れるような鋭い痛みが残る。

「いよいよ明日、か……」

きつく目を瞑ったユリの顔は、どこか祈るように見えた。

一度深呼吸をすると、真剣な面持ちでユリは練習を再開した。その日は日付が変わるまで練習を続けた。

3 想いを乗せて

還魂祭二日目。ユリが初めて巫女神楽を舞う日。巫女装束に身を包み、準備を整え終えたユリは、大きく息を吸っては吐いてを繰り返した。

舞殿の周囲には、三十人ほどの人集りひとだかができていた。時計の針が夜の七時を指すと同時に、先に舞殿へ上がった神官たちによる神楽笛が辺りに響き渡った。その音色を合図に、ユリは静かに舞殿へと向かった。

舞殿へ上がる階段の手前でユリは神楽鈴を受け取り、顔には目の周りを赤く縁取られた白い狐の面が付けられた。ユリは静かに階段を上がり、舞殿の中央へ進む。

これまでの練習のおかげで、なんとか神楽鈴を落とさずに舞うことはできるようになった。しかし、少しでも気を緩めると痛みと汗とで鈴を落としかねない。決して油断はできなかった。

最後の最後まで、表情までは誤魔化すことができなかったユリには、顔に付けた狐の面が唯一の救いだった。面の下で歯を食いしばって痛みに耐えるユリの表情は、誰にも知られることはない。

演奏とともにユリの舞が始まった。

緩やかに流れるような動き、短く響く神楽鈴の音。手首をひねるたびに流れる汗が宙を舞い、舞殿を照らすぼんぼりがそれをキラキラと輝かせた。薄暗い空の下、ぼんぼりの淡い輝きが舞殿とユリを照らし出す。日本独特の和楽器が奏でる音も相まって、観客たちの瞳にはユリの舞はより幻想的に映った。

舞が行われた約三十分のあいだ、観客たちはその舞に酔いしれるかのように静かに見守った。やがて演奏が終わり、ユリが舞殿の上で一礼をすると、歓声とともに盛大は拍手が湧き起こった。

面を付けたままのユリは、無事に舞を終えられたことを実感した。今はただそれだけしか考えることができなかった。

来たときと同様に、ユリは静かに舞殿を降りて参道の脇へと姿を消した。

道場まで辿り着くと、ユリはそこでようやく神楽鈴を置き、狐の面を外した。乱れる息も流れる汗もそのままに、力が抜けたように座り込んだ。

神楽鈴を手放した今も、手には僅かに鋭い痛みが残っている。だが今のユリには、舞を無事に終えられたという達成感が痛みに勝っていた。

何度も痛みを耐え、何度も諦めかけ、それでも今日ここに辿り着いた。おそらく自分一人では辿り着けなかったと思う。これまで弓道部の部長だったという立場から、誰かに頼ることよりも、頼られることが多かった。自分が部を引っ張っていかなければいけない。そういつた使命感にも似た考えが、誰かに頼るといふ発想を奪っていた。

でも今回は、アオイの言葉がなければ達成できなかっただろう。みっともなくアオイの前で取り乱したこともあったが、今ではそれも良かったのだと思えていた。

ぼんやりとここ数日を振り返っていると、暗く細い砂利道から足音が聞こえてきた。顔を向けると、暗闇からアオイの姿が現れた。

「伊吹くん」

「先輩、お疲れ様でした」

アオイは穏やかに言った。

「見させて貰いましたよ、先輩の舞。その、すごく……綺麗でした」
アオイの率直な感想に、ユリは僅かに頬を赤く染めた。

「そ、そう……あ、ありがとう」

「本当を言つと不安だったんです。自分の我が儘とか理想を先輩に

押しつけたばかりに、それが先輩の重荷になったんじゃないかって

「ううん、むしろ逆かな」

「え？」

「伊吹さんに励まされたから、最後までやり遂げることができたんだと思う。私一人だけじゃ舞うどころか、途中で投げ出してたかも

……」

「先輩……」

「だから、ありがとう」

そう言つと、ユリは不意におかしくなつて小さく吹き出した。

「え……ど、どうしたんですか？」

ユリはクスクスと笑いながら首を振つた。

「ごめん、ごめん。何だかここ最近、ずっと伊吹さんに ありがとう っって言つてるなあと思つて」

「そ、そうですか？」

ユリはうんうんと頷いた。それから何事か考えるように、目線を落とした。しばらく考えたのち、ユリは顔を上げてアオイを真っ直ぐ見つめた。

「ねえ伊吹くん。明日、学校の弓道場に来てくれない？」

「あ、明日ですか？ 特に予定はないですけど……でも部活も休みで道場には入れないんじゃない？」

「大丈夫、大丈夫。それじゃあ明日の二時に、いい？」

「は、はあ……」

強引に約束を取り付けると、ユリはアオイを見送つた。

見上げると、薄い雲がゆっくりと泳ぐように夜の空に流れていた。それをじつと見つめるユリの瞳には、どこか意を決した光が宿っていた。

翌日。空は生憎の曇り空で、どこか重苦しさを感じられた。

弓道衣に着替えたユリは部の道場で一人佇んで、アオイの到着を待った。空の表情とは対照的に、ユリの顔は晴れ渡っていた。

「先輩、お待たせしました」

「伊吹くん、五分の遅刻だよ」

「す、すいません……」

アオイは頭をぺこぺここと下げ、申し訳なさそうに謝った。その様子が、可愛く見えたユリは思わず口元を緩ませた。

「それじゃあ早速で悪いんだけど、私と勝負して」

「えっ、勝負？」

「そう」

「あの、勝負って何の……」

「私が今着ているのは何？　ここは何をすること？」

「……て、まさか弓道で？」

「正解」

一体何が起きているのか理解できないアオイは混乱した。

「だって、先輩は手が……そ、そう言えば病院は？」

「うん、この勝負が終わったら行くから」

「ええっ!？」

「ほら、早く準備する!」

「え、いやでも……は、はあ……」

訳が分からないまま、ユリに言われるがままアオイは準備を始めた。

弓道衣に着替えたアオイが道場へ戻ってくると、ユリは一つ頷いた。

「それじゃ私からいくね。そうね……的中制でいい？」

「分かりました」

ユリは静かに左手に弓を、右手に矢を持った。触れた瞬間、電流が走ったような痛みがユリの両手を襲う。それでも手を放すことなく、ゆっくりと両腕を上げ、弓を引き始める。痛みで腕をふるわせながらも、ユリの目は真っ直ぐに的を見据えた。その表情は部長を

務めていた頃の凜々しさが戻っていた。

「先輩……」

実のところユリの中では、勝敗はどうでもよかった。舞が終わった昨日の夜、アオイに今日の話をしたときにユリは決めていた。この矢を的に中てることができたなら、もう少し人に頼ることを覚えよう。

痛みに震える腕はやがて静止する。

アオイになら頼ってもいいんじゃないか。弱い自分を見せてもいいんじゃないか。ユリはそう思った。的に中つたら、言えなかったことを言おう。ありがとう 以外の言葉を。これはそのための儀式のようなもの。

引ききった弓からユリの想いを乗せた矢が、的へ向かって飛び出した。

パンッ。小気味良い音が辺りに響いた。

3 想いを乗せて（後書き）

まずは、最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

あらすじ部分でも触れていますが、本作は『あの日、透明な想い』内で投稿していた話を、本編から独立させたものです。

話の内容に変更点はありません。みつともない誤字・脱字の類は修正しましたが……。

作中の時間的には、本編のアカネが帰省するあたりから始まり、本作の終わりののちに、本編第四章のアカネとユリの再会へとつながります。

お気づきかもしれませんが、

本作は始まりと終わりが同じ1文になっています。

同じ文章で違う印象が与えられたら（違う意味が込められたら）なあと思ひ、

ちよつとしたお遊び感覚でやってみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7925x/>

あの日、透明な想い～もう1つの想い～

2011年10月29日03時16分発行